

「祈る喜びを共に」

マタイによる福音書 第6章 5節～15節

説教 川俣 茂牧師(清教学園教諭)

人は誰でも、困難や苦しみに出会うと不思議と「祈る」という行動に出るものです。「祈りなんて気休めにすぎない」と断言している人でさえ、本当にどうしようもなくなった時には、「苦しい時の神頼み」という語に象徴されているように、「神」に「祈る」という行動に出ることがあります。それだけ私たちの生活に於いて「祈る」という行動は、不思議なものではないということになります。

私たちキリスト者の「祈り」とは、「神との対話の時」であるし、その「祈り」を聴いて下さる「神」は唯一の神、父なる神だけです。しかし「祈り」をよく知っているならともかく、仮に祈りたくても誰にどう祈ったらいいのかわからないこともあります。そこで「祈りの手本」といったものが必要になってきます。それが「主の祈り」です。

「主の祈り」というと、東神大の松永希久夫先生の「主の祈りは地上の最大の殉教者」という指摘を思い起こします。内容をゆっくり考えたり噛みしめたりすることなく……という意味で、です。この際、この指摘を心の片隅に置いておきたいと思います。また、祈ることの大切さ、祈りの力というものを教会は本来的によく知っているはずで、教会が祈りによって生き、生かされてきたことが既にさまざまな形で証しされていることも併せて憶えておきたいと思います。

ところで、フォーサイス『祈りの精神』は「最大の罪は祈らないことである」という文章からはじまっています。あらゆる罪の原因には「祈らない」ということがあるのではないかと、その人が祈っていないからだ、と。しかし今日の聖書箇所はそういうことではなく、むしろ熱心に祈っている人を問題としています。しかしこういう状況に陥りやすいほど、私たちは熱心に祈っているのかと問われると、「？」と答えるしかないかもしれません。

確かに私たちには「祈れない時」もあります。しかし「祈れない」とはどういう状態を指すのでしょうか。どういう基準で決めるのでしょうか。そのような状態や基準を自己規定してしまうことをやめなさい、と主イエスは指摘しているようです。祈れない、祈る言葉が出てこな

ければそれでいい。泣きながら叫ぶような祈りでもいい。とても祈れる状態ではなければそれでもいい、と。なぜなら、私たちが必要なものを求める前から父なる神はご存知だからです。

とすると、私たちが祈ったとか祈れなかったとかいうことで、与えるものを変えてしまうような神ではないということになります。私たちが勝手に予想(期待)している以上の方法で必要なものを満たして下さい、と。祈れなくても、そのようにして与えられたこと、与えられたものに感謝すればいい。整わぬ祈りでも聴いて下さる。「祈れるではないか」と言って下さる神がおられるのです。

ところで、主は何を以て「祈り」としているのでしょうか。主は具体的に語っておられます。それが5節から8節です。しかも具体的な例まで語っておられます。それが「主の祈り」です。「このような祈りに生きなさい」と。主が教えたもうた祈りであるからこそ、私たちに与えてくださった祈りであるからこそ、自分の言葉での祈りも大切なものではありますけれども、それ以上に大切なものとしたらいい。そのような形で「主の祈りを生きる」、「主の祈りに生きる」ことが求められているのでしょうか。

私たちは「祈る」ということを知っています。いや、知らされています。私たち信仰者にとって「祈る」ということがどれだけ大切なことか知っています。しかし現実には祈ることを忘れてしまったり、祈りたいと思っていても祈る言葉が出てこなかったり、まったく祈れない時があるかもしれません。しかしよく考えてみてほしいのです。自分が祈れなくとも、誰かに祈られているかもしれないということがあるのです。自分のために祈ってくれている人がいる。実はこれほど大いなる喜びはありません。「祈り」から「恵み」が生み出されていくのです。神が私たちに与えたもうた大きな「恵み」の一つである「祈り」。それによって、究極的には主にある「喜び」と「恵み」に与ることができるのです。その「喜び」と「恵み」にますます与るため、ますます共に祈り合おうではありませんか。

(記 川俣 茂)